恥ずかしい家庭教師でごめんなさい

羽沢向一
挿絵／asagiri

試し読み版

リアルドリーム文庫

Contents

目次

プロローグ　家庭教師になりたい……4
第一章　オナニーをやめられない家庭教師でごめんなさい……13
第二章　牝犬になってしまう家庭教師でごめんなさい……52
第三章　快感を我慢できない家庭教師でごめんなさい……100
第四章　嫉妬で淫らになる家庭教師でごめんなさい……149
第五章　女同士で悦びに耽る家庭教師でごめんなさい……192
第六章　どこまでも恥ずかしすぎる家庭教師でごめんなさい……239
エピローグ　もっと欲しがる家庭教師でごめんなさい……284

登場人物 *Characters*

西塔 仁志
(さいとう ひとし)

自宅に一人暮らしの男子高生。テストの結果が悪くて悩んでいる。

南野 花蓮
(みなみの かれん)

数学科に通う真面目な女子大生。友達の紹介で仁志の家庭教師となる。

東川 由衣
(ひがしかわ ゆい)

英文科に通う上品な女子大生。仁志の同級生の家庭教師をしている。

石本 直也
(いしもと なおや)

仁志の同級生。やや強引な性格をしている。

プロローグ　家庭教師になりたい

「期末テストを返します」

二年四組の教室に、英語教師の桜井先生の声が響いた。学生時代は合唱部で鳴らし、今も市民コーラス隊に参加しているという自慢の大声がよく通る。

「相本、井上、菊地、近藤……」

名前を呼ばれた男女の生徒が座席を離れて、テストを受け取り、一喜一憂しながら戻ってくる。夏休み直前なので、男子は白いシャツとダークブルーのスラックス、女子は白いブラウスにダークブルーのプリーツスカートだ。

「西塔」

「はーい」

名前を呼ばれて、西塔仁志は悠然と足を運んだ。内心の期待が、唇の端に笑みとして表れている。

（英語は手ごたえがあった。八十点はいけるぞ。ありゃ!?）

桜井先生から手渡されたテスト用紙の点数欄には、赤いインクで大きく『65』と記

されている。
　自分の席に座って、正解したつもりの解答を凝視していると、頭上から声が降ってきた。
「また英語で勝ったぞ」
　顔を上げると、クラスメイトの石本直也（いしもとなおや）の顔がニヤニヤしている。中学二年生のときから同じクラスになりつづけていて、地味に中の上レベルの成績を競い合う仲だ。
「見たまえ、西塔君」
　直也が差し出した答案用紙の名前の隣には、『85』の数字。
「そんなバカな」
　と、仁志はつい口走ってしまった。
「どうして直也が、英語でそんないい点数を取れるんだ⁉」
「かなり失礼なことを言われてる気がするけど、まあ、かつての俺が英語の成績が酷かったことは認めよう。でも俺は生まれ変わったのさ。ある方法で」
「なんだよ、それ」
「その秘密は帰り道に教えてやるよ」
　直也の顔は、あからさまにしゃべりたくてうずうずしている表情だ。去年、直也が

ある人気アイドルと偶然遭遇して、サインをもらったときにも、こんな顔をして話を放課後まで引っぱった。
「わかったよ。楽しみにしてるよ」
仁志の言葉に、直也は満足気にうなずいて、自分の席へ向かっていった。

※

今日最後の授業が終わると、仁志は直也にうながされて高校を出た。いつもなら近くの商店街で道草をしながら帰宅するところだが、直也が商店街にポツンとある公園へ先導する。
仁志も高校に入学してすぐに、この名前も知れない公園に来てみたことがあった。樹々にかこまれた土地に年代物のブランコやシーソーが申し訳程度にあるだけで、まったく興味を引かれるところがなかった。足を踏み入れるのは、今日が二度目だ。
見たところ、約一年三か月ぶりの公園にまったく変化がない。
「どうしてこんなところに」
「あれが俺の英語の点数が上がった秘密さ」

直也が指さす先に、一脚の古びたベンチがあった。
そこに腰かけていた人物が立ち上がり、仁志と直也に向かって歩いてくる。
仁志は素直な感想を浮かべた。
（きれいな人だ）
年齢は二十歳くらいだろうか。肩で切った少し短い髪に縁どられた顔は、端整に整い、清楚な美しさを湛えていた。昔の物語で言えば深窓の御令嬢、今の話ならいつも図書館にいる文学少女という雰囲気だ。
上品な美貌にふさわしく、レモンイエローの飾り気のない半袖のワンピース。その胸は豊かに盛り上がっているが、それでいて巨乳を売り物にするグラビアでよく見るようないやらしさは感じさせない。
（巨乳なのに可憐な女の人もいるんだな。新発見だ！）
膝下まであるスカートの裾から出たふくらはぎだけでも、しなやかな脚線美をうかがわせる。素足に履いた白い瀟洒（しょうしゃ）なサンダルから覗く指まで愛らしい。
美女は二人の前で止まると、なにか質問をしたそうな表情で唇を閉じたまま、仁志を見つめた。仁志は、美女が無理に呼び出されて怒っているのかと思ったが、顔つきを見るとただ困惑しているようだ。

先に口を開いたのは、直也のほう。
「紹介するよ！」
自慢のアイドルのサインを見せびらかしたときと同じ顔で、美女の右隣に移動した。それだけにとどまらず左腕を美女の右腕に絡ませる。男女の半袖から伸びる素肌同士が密着する。
美女の頬がみるみる朱に染まり、より愛らしさが増した。恥ずかしがっている顔を確認するように直也が視線を左に走らせる。
「このすてきな美女こそ、俺の英語の成績躍進のスーパー秘密兵器。英語の家庭教師の東川由衣ちゃんだ！　外国文学の研究で名高い天下の東雄大学の英文学部の二年生だぞ」
右腕を取られたまま、由衣がていねいに、きれいに、頭を下げた。
「はじめまして。直也君の家庭教師の東川由衣です。よろしくお願いします」
あわてて仁志も頭を垂れた。
「直也の友達の西塔仁志です」
顔を上げて、あらためて由衣と直也を見つめた。大学生がアルバイトで高校生の家庭教師をすることはよく聞く。他のクラスメイトにも、家庭教師をつけているのが、

何人かいたはずだ。
（いや、でも……）
仁志の視線が、組んだ直也と由衣の腕にそそがれた。
（家庭教師って、生徒と腕を組んだりするものだっけ？）
仁志の疑問をよそに、直也は左腕に力を加えて、密着度を高める。
「由衣ちゃんの教え方が上手いから、俺は英語の才能が覚醒したのさ」
（それに、ちゃん付けっておかしくないか）
とも思ったが、口には出さずに、平凡な言葉を返した。
「へえ。そんなに違うものなんだ」
「というわけで、今日は期末テストで高い得点を取らせてもらったお礼に、由衣ちゃんの買い物につきあうから、また明日な」
「えっ！　それってデート⁉」
「そういうわけでは」
由衣の言葉を、直也の陽気な声がさえぎった。
「そう！　デートだな、これは。そうでしょう、由衣ちゃん！」
「あの……はい、そうです」

涼やかな顔を赤く染めてうなずく由衣の姿に、仁志は心臓がキュッとつかまれる思いがした。歩き出す仁志と由衣の背中に、つい声をかけていた。
「由衣さん、さようなら」
由衣の顔がふりかえり、小さく微笑んでくれる。
「また、どこかで」
腕を組んだままの女家庭教師と男子生徒が公園から出ていきかけて、直也が足を止め、仁志へ向けてふりかえった。
「今まで英語の成績は仁志が上で、数学は俺が上。他の教科は同じレベルで、勝負がつかなかったけど、由衣ちゃんのおかげで俺の勝利が決まったな！　夏休みの後の二学期が楽しみだぜ。俺と互角の勝負をしたければ、数学の家庭教師を見つけろよ。由衣ちゃんみたいな美人で優しくて教え方の上手い家庭教師なんて、他にいないだろうけどな！」
いつにない友人の調子に乗った言葉に仁志はイライラしたが、なにも言い返せなかった。仁志は数学が苦手で、テストの点数で一度も直也に勝てなかったのは事実だ。
敷地に植えられた樹々の陰に直也と由衣の姿が消えたのを確認してから、仁志はわめいた。

「なんだよ、あれ！　ちっくしょ――――――っ！　あんなきれいですてきな家庭教師がいたら、英語の成績が上がるのはあたりまえじゃないか！　俺だって美人家庭教師がいれば、苦手な数学も百点を取ってやるよ！　ちっくしょ――――――っ！」

むなしい叫びをさらに公園に響かせようとしたとき、仁志の視野の端に、人影が入った。

という気がした。

ハッ、と人影を感じた方向を向いても、あるのは並んだ樹々ばかり。

「……やっぱり、気のせいか」

半月ほど前から、放課後や休日に外出したときに視線を感じることがあった。しかしそのたびに周囲を見まわしても、知っている顔は発見できなかった。

「俺なんかにストーカーがいるはずないよな。直也につまらない嫉妬をするから、存在しないものを見てしまうんだ。だいたい今まで軽くテストを見せ合ってただけなのに、いきなり点数で上から目線になるってどういうことだよ」

商店街のゲームセンターで気晴らししようと考えて、仁志が急ぎ足で公園を出た後で、一本の木の幹の陰から若い女が現れた。

女はスマートフォンで電話をかけると、一気にまくしたてた。

「莉緒(りお)、今すぐ仁志君に連絡して、いい数学の家庭教師がいると推薦して！　そう、女子大生の家庭教師よ。莉緒の友達だと言えば、仁志君も安心すると思うから。家庭教師だからね！」

スマホの向こうの声が楽しそうに応じた。

「ようくわかったよ。親友のはじめての願いだもの。ちゃあんと段取りしてあげる」

第三章　快感を我慢できない家庭教師でごめんなさい

心地よい眠りの闇の中から、仁志の意識が抜け出しはじめる。

まぶたが開いて光が目に入る前に、素肌に密着するすべすべで柔らかい感触の気持ちよさを味わって、はっきりと意識が覚醒した。

まぶたを開くと、目の前に花蓮先生の寝顔がある。寝息がかかるほどの距離で向かい合う花蓮先生は、顔の筋肉を弛緩させて、唇の端から一筋の涎を垂らして、枕を濡らしていた。

（うわあ、ゆるんだ顔もかわいいなあ。それに胸に当たる巨乳も最高に気持ちいい）

視線をずらすと、自分の胸に押しつけられてたわんでいる二つの豊かな乳房が見える。全裸の花蓮先生が、全裸の仁志にコアラのように抱きついて眠っていた。胸だけでなく、二人の腹や太腿も触れ合っている。

昨夜は、仁志と花蓮先生はたぎる若い欲望のままに何度も交わり、そのままベッドから降りることなく、全裸で抱き合って眠った。

（このままかわいい寝顔をず――――っと見ていたいけど……）

同時にキスをしたいという思いが、ムクムクと湧き上がってきた。
（キスしたら起きちゃうかな？　このかわいい顔にどうしてもキスしたい！　いや、しかし寝顔も魅力的だ……）
昨日の午後までキスをしたこともない童貞だった男子高校生にとって贅沢すぎる選択肢に迷っていると、いっそう花蓮先生の肉体の感触が意識されて、股間に血液がどんどん流れこんだ。柔らかい家庭教師の下腹部に触れるペニスが、キスへの渇望と同じように大きくなっていき、亀頭が肌にこすれる。
（うっ、腹に当たって気持ちいい！）
亀頭に与えられた快感に押されて、仁志はぶつけるように唇を押しつけた。
「んうっ⁉」
花蓮先生のまぶたが開き、仁志の目を見つめる。顔にさっと驚きの色が表れるが、唇を逸らすことはしないで、自分からもキスをつづけた。自然と二人の舌が絡み合い、カーテン越しに入る朝日の中で、ピチャペチュと粘つく摩擦の音色を奏でる。
「んっ……ふぅん……んううう……」
「あむ、ちゅ……はふぅ……くんん……」
二人してたっぷりとディープキスを楽しみ、唾液の交換をした後に、絡んだ舌をほ

どいて、結ばれた唇を離した。
「はあああ……」
「ふううう……」
愉悦の中で足りなくなった空気を思いっきり吸って吐き、二人そろってベッドの上に身体を起こした。花蓮先生の目に、すでに立派に勃起している男性器が映る。
「朝からすごいわ。これが朝勃ちね！」
「いや、これはさっき、花蓮先生のおなかにこすれて勃っちゃっただけです。えーと男は赤ん坊でも、お爺さんでも、寝ている間に自然と勃起するもので、それが目覚めたときにつづいているのが朝勃ちと呼ばれる、とウィキペディアに書いてありました」
「へえ。男の人の身体のことは、やっぱり女にはわからないね」
仁志は自分のふくらんだ亀頭を指さした。
「だから、これは朝勃ちじゃなくて、花蓮先生の身体がエッチだから勃ってるんです」
「うれしい！　あ、でも、あの、一度、身体をきれいにするのはどうかしら。昨日は二人とも汗をかいたまま眠っちゃったから」
クンクンと花蓮先生の鼻が鳴る。
（自分の匂いが気になるのかな。女の人だし）

「二人でシャワーを浴びようか。またセックスするにしても、一回さっぱりしてからやろうよ」
仁志は右手で花蓮先生の左手を握ると、ベッドから降りた。花蓮先生も後を追って床に立つと、豊満な乳房がふるんと揺れる。
二人仲良く部屋を出て、軽やかに廊下を進み、そろってバスルームのガラス戸の取っ手を握り、勢いをつけて開けた。
「あ」
「あ」
独特な臭気があふれて、仁志と花蓮先生を包みこんだ。
臭いのもとが、バスルームの床の真ん中に鎮座していた。
クリーム色の手桶に、透明な尿が溜まっている。
「これが置きっぱなしだったなあ。そういえば」
二人はバスルームの入口の前で立ちつくし、じっと手桶を凝視しつづけている。
「自分たちで作ったものだけど、一晩経って冷静になって見るとバスルームにおしっこが置いてあるって、すごいインパクトだ」
仁志の言葉に、花蓮先生がうなずいた。

「ちょっとマルセル・デュシャンの『泉』みたいね」
「ああ、便器のアート作品。美術の教科書で見ました」
そして仁志が失礼だと思って口に出さなかったことを、花蓮先生が告げた。
「密閉した部屋におしっこを一晩置くと、きつい臭いがこもるわね」
「そうですね」
とりあえず換気扇のスイッチを入れてから、二人は黙ってまた手桶と家庭教師の小水を見つめていた。そして仁志は口を開いた。
「これをバスルームの排水口に流すわけにはいかないか。トイレに流そう」
「はい」
花蓮先生は手を伸ばして手桶を取ろうとしたが、仁志が止めた。
「ぼくが運びます」
「でも、わたしのものだし」
「花蓮先生のおしっこを、ぼくの手で運びたいんです」
手桶に両手をかけて、まるで王様への捧げものを運ぶように恭しく胸の前まで持ち上げた。その姿勢のまま回れ右をして、バスルームの外の廊下を進む。
手桶の液体をこぼさないために、仁志がそろそろと滑るように足を運ぶ後ろを、花

蓮先生が同じく足音をひそめてついていく。仁志の裸の肩甲骨と尻の動きを見つめて、家庭教師は頬を朱に染めて囁いた。

「自分のおしっこを仁志君に運ばれていると、なんだかたまらなく恥ずかしい」

「ぼくはなんだか誇らしい気分です、うわっ！」

意識を胸の前に捧げ持つ手桶に集中していたために、廊下に置きっぱなしのスリッパを踏んづけてしまった。

「危ない！」

バランスを崩した仁志の裸身を、花蓮先生が背後から両手で支える。

手桶の中で尿の水面が斜めになり、縁のギリギリのところで止まった。二人は廊下で全裸をくっつけたまま硬直して、大きな安堵の息を吐いた。

「危なかったあ……」

「よかった……」

安堵した後に、仁志と花蓮先生は顔を見合わせてくすくすと笑い合う。またそろりそろりと廊下を進んで、花蓮先生がドアを開けたトイレに入った。

「それでは」

「はい」

神聖な儀式を行っている気分になり、二人で手桶を持って、共同作業で尿をジョボジョボと便器に流した。柏手を打ちたくなったが、それはやめておく。
トイレの手洗いの水道で手桶を洗ってから、一度仁志の部屋に戻った。黒の油性ペンで手桶に『花蓮先生用』と書いて、バスルームに持っていく。
記名した手桶をバスルームの棚に置くと、花蓮先生がシャワーヘッドを持ち、まず仁志の身体に湯をかけた。あまり意識はしていなかったが、昨夜以来の汗が胸と腹の肌から流れ落ちると、たまらない爽快感に声が出る。
「うわあ、すっきりするう！」
「背中を向けてください」
母親のように言う花蓮先生の言葉に従い、仁志は湯を浴びながら反転した。肩から背中、尻までシャワーをかけられる。
その後に花蓮先生は自分の身体にシャワーを浴びて、汗を流した。
花蓮先生のシャワーが終わったのを見計らって、仁志は正面から告げた。
「昨日、できなかったことをしたいです！」
力んで大きくなった声が、バスルームの中にわんわんと反響する。
「昨日できなかったことって」

「パイズリです！　花蓮先生の大きなおっぱいで、ぼくのを挟んでください！」
花蓮先生の美貌がうっとりと微笑み、淫らな欲望の熱で輝いた。
「わたしもパイズリしたい！　わたしの大きくて恥ずかしい胸で、仁志君のおちんちんを感じて、いっぱい愛したいわ！」
「よかった！　それじゃこうしたほうがいいかな」
仁志は浴槽を覆う蓋をどけた。空っぽの浴槽の縁に裸の尻を乗せて腰かけると、両脚を広げる。股間ではすでに期待にふくらんだ男根が勃ち上がっていた。
左右に開いた太腿の間に、花蓮先生が膝をついた。上から見下ろす仁志の前で、二つの乳首がともに触れてもいないのに膨張して、勃ち上がっていく。ピンクの色合いも濃さを増しているようだ。
「花蓮先生の乳首が勃起してます！」
パイズリをすると思っただけで、乳首が敏感な反応を示していることを指摘されて、花蓮先生はひざまずいた裸身を悶えさせた。乳肉がたぷたぷと揺れて、しこった肉筒の先端が円を描く。
「あああ、恥ずかしいわ。オナニーのしすぎで、こんないやらしいおっぱいになった、と仁志君も思っているのね」

（そんなことは思ってません）
と、言おうと考えたが、花蓮先生は肯定してもらいたがっていると思い至る。
「そう思ってます。そんな花蓮先生が、ぼくは大好きです！」
答えるとともに、両手の人差し指で左右の乳首を下へ向けて押し下げた。
「あんっ！」
また家庭教師の裸体が心地よさそうにくねくねと踊る。
「はあっ、そう言ってくれてありがとう。本当に仁志君は、わたしが欲しいことをしてくれるのね。パイズリもはじめてだから、よくなかったら言ってね」
両手で左右の乳房を下からすくい上げるように持って、前へ進む。
仁志は歓声を発した。
「うわあ。すごい！」
上から見下ろすと、前進する二つの巨乳の間に、自分の勃起ペニスが入っていくのがよくわかる。アダルト動画でパイズリも鑑賞したが、現実に自分の身に起きると迫力が違う。
花蓮先生は自分の胸を閉じた。密着する二つの乳房の内側に、たぎる肉棒が包みこまれる。肉幹は根もとまで柔肉に埋まり、ぴっちりとふさがった胸の谷間を覗いても、

亀頭の存在もうかがえない。
「うおっ！」
「はあん！」
二人が同時に声をあげ、悦楽に身をよじった。
仁志は昨夜味わった手や口や膣とも違う心地よさに陶酔する。柔らかさと弾力を兼ね備えた豊満な乳肉に、亀頭から肉幹の付け根まで隙間なくみっちりと押し包まれているだけで、心地よい痺れがじわじわと染み出してくる。ペニスだけでなく魂も強く挟まれ、抱かれているようだ。
花蓮先生も長年の自慰で性感を高めてきた乳房で、熱く燃える男のシンボルを抱きしめる喜びに浸る。ただ肉棒を挟んでいるだけで、乳房の内側がぐつぐつと熱く融解して、甘く濃厚な蜜になってしまう思いがしていた。
「花蓮先生、ぼくのを挟んでるだけで、そんなに感じるんですか？」
「はあっ、そうなの。仁志君のおちんちんを挟んでいるだけで、おっぱいが何倍も感じるようになってしまうの。はんん、このままおっぱいが蕩けて、おちんちんとひとつになる気がするわ」
「ぼくも花蓮先生の巨乳に挟まれてるだけで、気持ちよくてもう暴発しそうです。お

うううっ！」

仁志が新たな喜悦に背筋を震わせる。花蓮先生が乳房を持つ両手を動かしはじめた。特別な技などは持っていないので、左右の胸がちぐはぐに動くが、仁志は歓喜に満たされる。ボリュームたっぷりの乳肉の乱舞で、亀頭と肉幹をこすりたてられて、快感の電流が股間から全身へビリビリと走りまわる。

「花蓮先生のおっぱい、最高だ！　最高に気持ちよすぎるう！」

「あはあああ……」

パイズリで仁志に奉仕しているはずの花蓮先生も、熱い喘ぎ声を噴き上げた。敏感な巨乳が外側からは自分の手でこねられ、内側からは硬い肉棒でえぐられる。花蓮先生の脳内では、自分がパイズリ奉仕をしているのではなく、仁志に胸の女性器を貫いてもらっていると認識していた。

思いは自然に言葉となって、口からあふれる。

「ふあああ、仁志君、もっとわたしの胸を突いて！　もっと深くえぐって！」

「花蓮先生、こうですか！」

仁志は意を汲んで、浴槽の縁に乗せていた尻を浮かせて、立ち上がった。ペニスの位置の変化に、花蓮先生も無意識に膝を伸ばしてついてきて、乳房の間から逃さない。

仁志の両手が花蓮先生の両肩をつかみ、腰を勢いよく前へ突き出した。左右から押しつけられて密着する乳房を、亀頭が押し開いて突き進む。亀頭が胴体にぶつかり、上へ滑って、胸の谷間から顔を出した。

「ひいいん！」

亀頭で胸肉を強くこすられて、花蓮先生は愉楽の悲鳴を放つ。乳房の表面ではなく、乳房の内部に突き入れられ、乳肉をかき混ぜてもらっている妄想が浮かぶ。

「あおおっ、いいっ！　仁志君のおちんちんが、わたしの胸に入ってきて、すごく気持ちいいのう！」

「ぼくも、これ、いいです！　花蓮先生のおっぱいの中が柔らかくて、ムチムチで、ぼくのが蕩けそうだ！」

パイズリは男女二人の共同作業となった。仁志は腰を引いて、胸の外へ出た亀頭を巨乳の中に沈ませる。すぐにまた腰をバストへ突き入れて、再び男肉の武器で柔肉の壁を破り、亀頭を外へ押し出した。腰が前後に動くたびに、尻の筋肉がキュッと引き絞られては弛緩する表情を見せる。

花蓮先生も懸命に自身の乳房をうねうねと踊らせて、暴れる年下の肉塊を迎え入れると、胸を貫通する焦熱の快感に全身が焼けた。自分のバストの谷間から現れる亀頭

を目にするたびに、頭にツーンと刺激が走る。
「ふぁあん、いいっ！　いいっ！　あふっんん、たまらないの！」
上半身だけでなく、膝立ちの下半身も大きくうねっている。豊かな尻が右に左に振りたくられ、歓喜の汗の滴をバスルームの床に振りまいた。
家庭教師と生徒の共同作業は、すぐにクライマックスへと近づいた。
「花蓮先生、もう出そうだ！」
そう告げて、仁志は無意識に花蓮先生の両肩から手を離し、自分の下腹部に押しつけられている左右の乳房の先端に潜りこませた。自分の腹と巨乳の隙間を手探りして、硬くしこった乳首を発見する。
親指と人差し指で勃起肉筒をつまんで、強くひねった。花蓮先生はガクンと背中をのけぞらせ、喉をビリビリと震わせて、絶頂の悲鳴をバスルームの天井へ向けてほとばしらせる。
「あっひいいいいい！　イクッ！　ダメえ、仁志君よりも先にイクッ！　くおおおおお！　イッちゃううッッ!!」
十本の指が乳肉に深々と食い入り、より強く乳房を男根に押しつける。花蓮先生の絶頂の恥態と強烈で柔らかい女肉の圧迫が、仁志の射精のトリガーを引いた。

「おおおお、出るっ！　ぼくも出るうッッ」
突き上げた亀頭の先端が乳房の間から飛び出した瞬間に、上を向いた鈴口から白いマグマが噴火した。爆発的な勢いの精液が、エクスタシーに染まる美貌に叩きつけられる。
「わぷっ！　うくっ！」
形のよい顎から上へ向かって伸びる大量の精液が、頬や鼻をコーティングした。精液が唇の中に入る。鼻の穴にも入る。
「くうんん、仁志君の精液、おいしいっ！　イクうう！　射精を浴びてもっとイッちゃうううううッッ!!」
花蓮先生は乳房から両手を離すと、仁志の腰にしがみついた。精液まみれの顔を、亀頭と肉幹にこすりつける。
「はふう、好き……大好き……こんなわたしを受け入れてくれて、本当にありがとう」
「ぼくのほうこそ、ぼくを選んでくれてありがとうございます」
感謝の言葉を返しながら、仁志は腰を小刻みに動かし、今も性欲のエネルギーに満ちている亀頭で、花蓮先生の頬にこすり返した。
亀頭の頬ずりをつづけながら、右手を伸ばしてシャワーヘッドを取ると、湯を花蓮

先生の顔にかける。顔に射精されているかのようにうっとりとした表情が水滴を弾き、精液が洗い落とされていく。

きれいになった花蓮先生へ、仁志は告げた。

「もうひとつ、昨日はやらなかったことをしましょう。バックから花蓮先生とセックスしたい！」

「わたしも後ろから、仁志君にいっぱい突いてほしい」

花蓮先生はまるで犬のように首を振って、顔や髪から水滴を飛ばすと、床に四つん這いになった。クイッと腰を上げて、仁志へ向けて湯に濡れた尻を差し出し、今度は犬がしっぽを振るようにぷるぷると動かしてみせる。素早く運動する尻の残像の中に、つつましやかにすぼまる肛門と、ふっくらした恥丘の中心でほころぶ生々しい花弁が見えた。

「花蓮先生ッ！」

仁志は右手で四つん這いの腰をつかんで尻の躍動を静止させると、左手で反りかえる肉棒の向きを調整する。そして一気に突進した。

というわけにはいかない。昨夜の正常位とは勝手が違う。亀頭を開いた女性器の内側に押し当てると、少しうろうろして肉襞をかきまわした。

花蓮先生が腹を上下に動かして、甘い懇願の声を出す。
「あっ、うっんん、焦らさないで、ふああ、早く入れて」
膣口を発見したと確信すると、今度こそ一気に挿入した。たちまち男根全体が熱く濡れた女肉に包まれ、強く締めつけられる。
「入ったわ！　あああ、おちんちん、いいっ！　わたしのオマ〇コが、気持ちよくって悦んでるう！」
外見に似合わない卑語を口にすると、家庭教師の全身が桃色に輝くようだ。膣内の温度も上昇していくのを感じて、仁志はエンジンに火がついた腰を前後に動かしはじめる。
「花蓮先生、ぼくので好きなだけイッてください！　うおおう！」
「仁志君も好きなだけ、わたしのオマ〇コに射精して！　あっひいいい！」
二人が後背位で交わって最初の絶頂を迎えるまで、長い時間はかからなかった。

※

寝起きの激しい情事が終わってから、二人はもう一度シャワーで汗を流した。

仁志は自分の部屋の箪笥から自分の衣服を出して着た。花蓮先生は家に残っている仁志の母親の下着とブラウスとスカートを借りた。バストのカップは花蓮先生が上だが、幸いにも母親のほうが全体のボリュームは大きいので着られた。

仁志が手早く作った朝御飯を食べると、二人いっしょに買い物に出かけた。

近所の商店街の生活用品店で、新しい手桶を買う。花蓮先生の放尿を受けたクリーム色の手桶とは同形の黄色いものだ。

そして店を出たところで、花蓮先生はきっぱりと言った。

「今日はここでお別れしましょう」

予想していなかった言葉に、仁志は心底から抜けた顔になる。

「えっ、どうして⁉　家に戻って、もっといろんなことをしたい」

花蓮先生は少し前のバスルームで見せた蕩けきった顔とはまったく別人の、優しさと厳しさを内包した笑顔を見せる。

家庭教師の顔だ。

「だらだらとしては、だめだと思うの。メリハリが必要よ。二日後に家庭教師の授業だから、またそのときに会いましょう」

「いや、でも」

「ありがとう。二日後にね。借りたお母様の服はクリーニングして返すね」
花蓮先生はあっさりと背を向けて、商店街の中を駅へ向かってスタスタと歩いていった。
「えええええっ!?」
仁志は右手に手桶が入ったビニール袋を持ち、呆然と見送るしかできない。
(花蓮先生のああいう態度も、花蓮先生が求めるプレイの一環なのかな……)
そして自分もとぼとぼと家へ向かった。

※

二日後の午後三時。
仁志は十分前から玄関の上がり框にあぐらをかいていた。
今日は脱ぎやすさを考えて、青い無地のTシャツに、カーキ色の短パンだ。手にしたスマホの時刻をじっと見つめて、たった十分後を今か今かと待ち受けている。
スマホに15：00が表示された刹那(せつな)、インターホンのチャイムが鳴った。まるで相手も玄関の外に待機して、午後三時になるのを待っていたように思える。仁志は玄関の

ドアノブに跳びつき、勢いよく開ける。
目を丸くした花蓮先生が立っていた。
「ドアが開くのが早くてびっくり。玄関で待っていたの？」
驚きの表情から笑顔になった花蓮先生の服装は、三日前に来たときと同じく、白い半袖のブラウスとダークブルーの膝下丈のスカート。
（花蓮先生、前と同じ服を着てるんじゃ？）
仁志は疑惑を抱いたが、よく見るとブラウスの襟やボタンの形が異なっている。スカートもダークブルーの濃さが微妙に違うようだ。
「おかしなことを聞くけど、どうしていつも白いブラウスと暗い色のスカートなんですか」
「女教師はこういうファッションでしょう。母は中学の英語教師で、学校に行くときはいつもこういう服装だったわ。わたしも家庭教師をするために、母から服を借りているのよ。これもそうよ」
借り物とは思えないほど、ブラウスもスカートも花蓮先生の体形にぴったりと合っている。まだ見ぬ母上も、若いころは花蓮先生と同じ抜群のプロポーションだったのだろう、と仁志は妄想した。

「花蓮先生は形から入るタイプなんですね」
「そうかも」
「それなら、ぼくからの形から入る提案ですけど、今日の授業はブラジャーとショーツだけでしてほしいです。きっと盛り上がりますよ！」
昨日の夜に思いついたことだ。この二日間に花蓮先生が好きそうなプレイについていろいろ検索して、自分がやりたいことも含めて頭をひねり、この羞恥授業なら絶対に喜んでくれる、と確信していた。称賛の言葉をいただこうと胸をワクワクさせて待っていると、花蓮先生の顔つきが変化する。微笑みが消えて、授業中に騒ぐ生徒をにらむ先生の険しい表情になった。
「ダメよ」
「え⁉」
本当に先生に注意された気分になって、意気消沈してしまう。
「そういうことは絶対に許容できないわ。家庭教師としての授業は真面目にやる。仁志君の恋人としてのプレイとは別よ。厳格に分けなくてはいけない」
花蓮先生の厳しい言葉を浴びせられて、仁志はしゅんと肩を落として、わざと堅苦しい言葉で謝った。

「は、はい。心得違いをしてました」
胸の内でつけくわえる。
（プレイって難しい！　やっぱり人によって全然違うんだなあ。もっと予習復習しなくちゃ）
「わかってくれればいいわ」
花蓮先生は笑顔に戻り、かがんで靴を脱いだ。その動作でスカートに浮かぶ尻の美しい形と動きを見つめながら、仁志は告げる。
「はい。プランAを破棄します」
仁志は花蓮先生と並んで、すごすごと自分の部屋に入った。

※

「今日はここまでにしましょう。最後に質問はあるかしら」
真面目な声で言った花蓮先生の顔は、家庭教師らしい真摯な表情の下に、なにかを期待している色が透けて見えた。仁志は期待に応えようと、教科書のページを指さす。
「ここがよくわからないんだけど」

いじわるのつもりで言ったのではなく、本当にわからない。花蓮先生は大好物の餌を前に『待て』と言われた小犬のような空気を醸し出しながら、家庭教師の義務を果たそうとする。

「それはこう考えるの。まず因数分解してみて」

と、ていねいに解説をはじめた。

聞いていた仁志の脳内で回路がつながった。

「そうか！　そういうことか！　はじめて意味がわかった！　導き出した値を代入すればいいんだ」

ノートに解答に至る証明を書きこんでみせると、花蓮先生は手を叩いてうなずく。

「仁志君がきちんと理解してくれてよかったわ。あの、それで、プランBはあるの？」

「なんのことでしょうか？」

仁志はわざとらしく首をかしげて、家庭教師の顔を見つめる。また花蓮先生の美貌に、餌をおあずけをされた小犬のかわいい顔が重なった。

「玄関でプランAは破棄すると言ったでしょう。ということはプランBもあるのよね」

「ありますよ」

目の前で、餌に跳びつく許しが出た小犬の顔が現れる。

「なになに！」
「椅子に縛られるのはどうですか」
花蓮先生の顔に、小犬とは違う妖しい色が濃厚に塗られた。
「体験したい！」
「居間にプランBの用意があります」
仁志は花蓮先生の手を取り、外でデートをするように家の中を歩いて、居間に入った。口でドラムロールの効果音をつけ、オーバーアクションで居間の中心に前もって置いておいたものを示す。
そこにあるのは一脚の椅子。
黒い木製で、背もたれだけでなく、左右に肘掛けがついたアームチェア。おしゃれなデザインの椅子で、普通の庶民の家屋である西塔家の中だとかなり浮いて見える。
「昔、親父が書斎用に小遣いをはたいて買ったものなんだ。何年か後に、授業のときに花蓮先生が座ってる機能性重視なデザインの椅子を買って、この椅子は奥の部屋にしまっちゃったけど。親父のなかでは思い出の記念品で、捨てられなかった。そしてついに新たに役に立つときが来たのです！」
仁志は家庭教師の手を引いて、アームチェアの前へ移動させる。

「さあ、座って」
「はい」
花蓮先生は早くも期待で頬を赤らめて、ダークブルーのスカートの尻を、木製の黒い座面に乗せた。
「これでいいの。あっ！」
仁志は無言で花蓮先生の右脚のふくらはぎを握ると、ゆっくりと持ち上げて、右側の肘掛けにひっかけた。
花蓮先生は意図を理解して、抵抗は見せなかった。つづいて左脚のふくらはぎもつかまれると、力を抜いてされるがままになる。
両脚を左右の肘掛けに乗せると、当然大開脚の姿勢になり、スカートの裾がたくし上げられる。ショーツを完全に露出して、仁志へ向かって太腿の間のクロッチ部分を披露することになった。
花蓮先生のショーツは、今日も過去と同じように装飾のない清楚な純白。面積も広めで、股間と下腹部と尻をしっかりと保護している。
花蓮先生は座面の上で尻をもじもじとよじらせて、太腿に挟まれたクロッチ部分に皺を寄せた。

「ああん、こんなポーズをさせられるなんて、とっても恥ずかしいわ」
口でそう訴えても、両脚を肘掛けから降ろそうとはしない。むしろ開いた下半身を、無意識にジリジリと仁志へ向かって進めている。
仁志は蠢くショーツから目を離さないで、居間に用意しておいた手提げ袋を逆さにした。中から様々な材質の縄や紐、鋏と書道用の筆があふれ出る。家の中から使えそうな物を集めてきたのだ。
「花蓮先生はどの縄で縛られたいですか？」
「そうねえ。えーと、ガムテープがいいわ」
仁志は床に転がった布ガムテープを拾い上げたが、首をかしげる。
「念のために入れておいたけど、ガムテを手足に巻いたら、剥がすときに痛いですよ」
「その痛みに、ちょっと興味があるのよ」
（やっぱり難しい！）
仁志はガムテープを花蓮先生の顔の前に突き出して、わざとペリペリと音を立てて長く伸ばした。花蓮先生の頬がピクピクと動き、ガムテープの粘着面が伸びていく様子を視線で追う。
「縛るよ。いや、これは貼りつけるかな」

「はい。どうぞ」
右脚の膝の裏と肘掛けが接触しているところに、ガムテープを巻きつけた。粘着面が素肌に直接触れると、花蓮先生の表情がくすぐられているような笑みを作る。
「んふ、不思議な感じがする。ガムテープをこんなに肌にべったりと貼られるなんてはじめて。あっんんん……」
左脚にもガムテープが巻かれて、肘掛けに固定された。仁志は少し声を低くして、芝居がかった大きな動作で自分の作品へ言い放った。
「どうだ。これでもう花蓮先生の気が変わって逃れようとしても、自分の意志で両脚を閉じることすら不可能なのだ！」
しかし花蓮先生は少し不満そうな面持ちで、両手を前に差し出した。
「手は？　腕を縛らないの？」
「あ、そうか。手の縛り方のリクエストはありますか？　やっぱり後ろ手に縛るのがいいかな？」
「頭の後ろで縛ってほしいわ。捕まって無力化されている感じが出ると思う」
口だけの説明では難しいと思ったのか、花蓮先生は自分から両手を後頭部にまわして、指を組み合わせた。すぐさま仁志は椅子の背もたれの後ろにまわり、組んだ両手

にガムテープを巻きつけていく。きれいな黒髪にはテープの粘着面がつかないように注意を払ったが、どうしても何本もの長い髪の毛を巻きこんでしまった。
（これは剥がすときに痛そうだな。でも花蓮先生は悦ぶかもしれない）
アームチェアの正面に戻ると、いかにも女教師らしい地味な純白ブラウスとダークブルーのスカートを着た美女が、椅子に拘束されている姿を見つめる。
両腕は頭の後ろにまわされて固定されている。両脚は大きく左右に広げて、肘掛けにガムテープで縛りつけられた。白い布を豊かに盛り上げるバストが、深呼吸をするように派手に上下している。
スカートをたくし上げられて、開脚を強いられている太腿の中心では、白いショーツの底がもじもじと皺を作っては広げた。
身動きを封じられた花蓮先生の顔は、悦びと昂りでキラキラと輝いて見える。
自分と花蓮先生が共同で創りあげた生きたアートに魅せられて、仁志は感激の声を発した。
「花蓮先生、すごくきれいです！」
「うれしい！　わたしもとってもドキドキしてる。こうして身動きできなくされているだけで、いろいろおかしくなりそう。はあああ、これだけなの？　鋏はどう使うつ

もりなの？」
「鋏は、その……」
一度声をよどませて、あらためて高くした。
「花蓮先生の下着を切って、穴を開けてもいいですかっ！」
「すてき。切ってもいいわ。ううん。お願い、切ってほしい。でも、わたしにも切るところを見せてくれるかしら？」
「わかりました！」
即座に仁志は居間を出て、母親の部屋からキャスター付きの姿見の鏡をガラガラと押して戻ってきた。長方形の鏡面に花蓮先生から見て全身が映る位置を定める。
鏡に映る自分自身のあられもない姿を、花蓮先生はうっとりと眺める。
「これがわたし……なんていやらしい。ずっとこうやって縛りつけられた姿を見たかった……はあっ、仁志君、わたしをもっといやらしい姿に変えて」
鏡像に、仁志が映った。ブラウスのボタンに指をそえて、次々とはずしていく。勢いをつけて前をバンッと広くはだけられ、白いブラジャーに抱かれた巨乳があらわにされた。純白のブラジャーは二日前と同じく、大きな乳球全体をきっちりと保持する立派なデザインだ。

「今日も、花蓮先生のおっぱいはきれいです」
二日前のバスルームで、ブラジャーをはずした剥き出しの生おっぱいをたっぷりと堪能したのに、今日もまた新鮮な迫力に感激した。カーキ色の短パンとトランクスの中で、勝手に肉棒が大暴れしている。
床から裁縫用の裁ち鋏を取り、ブラジャーの右のカップに当てた。
「鋏で傷をつけるとまずいから、じっとしてください」
「これはハラハラドキドキする」
仁志は作業に集中して返事をしない。左手でカップを持ち、乳房から浮き上がらせて、裁ち鋏の刃を食いこませた。しかし上手く切れずに、眉間に皺が寄る。
(ブラジャーって思ったより厚いんだ。アダルト動画で見たブラジャーは薄くてスケスケだから、簡単に切れると思ってた)
予想以上に時間がかかったが、どうにかカップの真ん中を切り取って、穴を開けることができた。同じ手間をかけて左のカップの中心も丸く切り落とした。苦労して完成させた自分の作品に、仁志はしげしげと見入る。
「思った通りだ。すごくいやらしい!」
花蓮先生も直接見下ろす自身のバストと、姿見に映った胸を交互に見つめた。

はだけたブラウスの中からブラジャーが大きく盛り上がり、左右のカップの中心に開いた穴から乳球の頂点が覗く。ブラジャーに押しこめられた乳肉の圧力が、穴の部分だけ解放されて、乳輪がもっちりとふくらんでいる。

ピンクに色づいた乳首は、卑猥なポーズで緊縛されただけで高く勃起して、官能の深さを表現していた。花蓮先生の昂る身体が震えて、自由になった肉筒が上下左右にわななきつづける。

「はああ、本当にいやらしい格好だわ。こんないやらしい姿を仁志君に見られて、鏡に映されて、はううん、たまらなく恥ずかしくておかしくなっちゃう……」

陶酔する花蓮先生の顔の前に、仁志は二本の書道の筆先を差し出した。

「筆の毛の部分を舐めて、唾をつけてください。昨日、文房具店で買って、水で洗っただけの新品だから、墨はついてないです」

「筆のこの毛の部分は『穂(ほ)』と言うのよ」

花蓮先生は穂を二本まとめて口に含み、クチュクチュと音を鳴らして舌先で舐めまわして、唾液をたっぷりと染みこませた。

家庭教師の口から出てきた唾液まみれの穂を、つづいて仁志も咥える。

(ああ、花蓮先生の唾の味がする)

花蓮先生の唾に自分の唾を混ぜ合わせると、ベトベトの筆先で右の勃起乳首の側面をなぞる。

「ひゃうん！」

少女のように愛らしい悲鳴をあげて、花蓮先生の二十歳の身体が震える。両脚を固定されているために、動くのは上半身ばかり。両腕が後頭部で縛られた不自由な胴体を前後に跳ねさせて、木製の椅子をギシギシときしませた。

縛られていない巨乳はいっそう大きく弾み、ピンクの乳首がたわんだ円を描いた。その動きで乳首が自分から穂に触れてしまい、さらに二度三度と快感のパルスがパチパチと発生する。

「ひん！　あっ、あふっ！」

花蓮先生ははっきりと自覚している。自分にとって羞恥心は性感帯そのもの。恥ずかしいポーズを見せるのも、肉体の露出を見られるのも、すべて愛撫になる。このアームチェアに尻を下ろした瞬間から、性感帯を愛撫されつづけて、快感と歓喜を体内に蓄積しつづけている。

乳首に直接刺激を送られるのは今がはじめてだが、花蓮先生の感覚では長い時間の前戯の後で下された一撃だ。

さらにもう一撃。仁志が筆を動かし、同じ乳首の反対側の側面を、唾液に濡れた筆でなでられた。
「はひい！」
乳首から放たれる悦楽のエネルギーを浴びて、身体が浮き上がるようだ。前に見たホラー映画の一場面のごとく、自分といっしょに椅子の四本の脚が床から離れたように錯覚する。
「はぅんんん、もっとして。仁志君の手で、わたしの乳首をメチャクチャにして」
「乳首を筆で遊ばれるのが、そんなに気持ちいいんですか？」
花蓮先生のねっとりと潤んだ瞳が懇願するように、仁志を見上げる。
「気持ちよくてたまらない。椅子に縛りつけられているだけで、恥ずかしいくらいに感度が高まっちゃうの」
しゃべりながらも、熱い視線は仁志が動かす筆の先を追っている。
「二日前に花蓮先生はパイズリしてイッたけど、もしかして筆でなでられるだけでイケますか？」
「体験したことがないからわからないけど、仁志君に乳首だけを責められて、イッてみたい」

「イカせてあげます！　花蓮先生がおかしくなるくらいに！」
二本の筆先が左右から、右側の乳首を挟んだ。二人分の唾液でぬめつく細い毛の束が、屹立するピンクの肉筒の表面で追いかけっこをする二匹の犬のように走りまわる。
「ひあああ！」
身体の中のほんの小さな一部分を責められているだけなのに、まるで全身を巨大な筆でなでまわされているように感じてしまう。椅子に貼りつけられたまま、無数の毛の海に沈められた自分の姿が脳裡に浮かぶ。
「うんんっ！　そっ、それ！　いいっ！」
肉筒の側面をなでまわされるだけでなく、乳首の頂点を筆先で垂直につつかれた。繊細な毛の束の先端がいっせいに敏感な器官を突いてくる。
「はひいっ！」
一本の筆先が離れると、もう一本の筆先が乳首を襲撃する。また多数の毛がピンクの肉に突き刺さった。
「ひいいいっ！　チクチクする！　乳首がチクチクされてる！　はっあああ！」
花蓮先生の甲高い悲鳴を聞いて、仁志はさらに勢いをつけて両手に持つ筆を交互に動かし、乳首をつつきつづける。突くばかりではなく、また筆を走らせて、乳首全体

を余さずになでまわした。
「やあっ！　ダメ！　強すぎる！　あおおう、筆がすごひのぅ！」
仁志は右の乳首を執拗に責めつづける。片方の乳首だけで花蓮先生を絶頂に押し上げられるかという実験、いや、挑戦に熱く酔っている。
「花蓮先生、もっと感じてください！　乳首で果てる姿を見たいです！」
「あいいい、イキそう。はひゅう、もう少しでイッちゃいそう！　うっくううう、ああ、イカせて！　このまま乳首だけで、わたしを狂わせてッ！」
家庭教師のよがり声と懇願の言葉が高くなるのに合わせて、仁志の両手の動きが加速する。短パンの前は、今にも突き破られそうに高々とテントを張っていた。無意識に腰を振って、亀頭を布にこすりつける。
「花蓮先生、イッて！　イッてください！　ぼくにイク姿を見せて！　うおおおう、イケえッ！」
猛々しく咆哮（ほうこう）すると、たぎる感情にまかせて顔を右の乳房に押しつけ、乳首を咥えた。舌で舐めまわし、思いっきり吸い上げる。
「んんんん――――んんんッ――――――――んッッッ！」
「ほっおおおおおおおおおおお！　乳首がちぎれちゃうッ！　ちぎれてイッちゃう

うううんんッ！　イックううううううううッッッ!!」
ギシッ！　ギシギシギシイッ！
木と木がこすれ合うきしみが鳴る。絶頂の叫びに、想像もしない使われ方をしたアームチェアの苦鳴が混交する。
「はあああぁぁぁぁぁぁぁ……ぁぁぅぅぅうう……んんん……」
花蓮先生は身体で背もたれをへし折る勢いでのけぞったまま、だらしなく惚けた顔を天井へ向けた。
右胸から仁志の顔が離れて、家庭教師の弛緩した美貌を覗きこむ。いつもより高い体温とエクスタシーの香りというべき甘い体臭をムッと感じる。
「花蓮先生、イッたんですね」
「ああああ、イッちゃったわ……」
随喜の汗で飾られた顔をコクコクとうなずかせた。直後にゆるんだ表情がキュッと引きつる。左の乳首に二本の筆が押しつけられ、うねうねと責めたてられる。
「ひっ、また！」
「もうひとつの乳首でもイッてください」
仁志の激しい淫欲に憑かれた笑顔に、花蓮先生は心臓を鷲づかみされた。年下の恋

人から、燃え盛る欲望の目で見られることが幸せでたまらない。その目で見つめられているだけで、もっと官能の感度が深化していく。
「あんんん！　して！　乳首をいじめて、わたしをもっと飛ばしてッ！　わたしがイキ狂うところを見つめて！」
「見てます！　花蓮先生のエロい姿を全部見てます！」
仁志の手の動きが変わり、二本の穂先が連続して、爆発寸前まで勃起した乳首を突く。多数の毛の先端が、快感神経に垂直に刺さり、無数の火花を咲かせては華々しく飛び散らせていく。
「エロい！　あっくうう、そうよ。あうんんん、わたしはこのあいだまで処女だったのに、エロい女なの！　エロすぎてどうしようもない女ッ！」
「そうです！　花蓮先生はエロすぎます！」
乳首が突かれては、なでまわされ、また毛先で刺される。交互に変化する刺激に、花蓮先生は翻弄され、追いつめられていく。
「あああああ！　はひっ、ひあああああッ！」
「エロすぎる花蓮先生が大好きです！　だからエロくイカせてやる！　イケッ！　エロエロにイッてしまえッ！」

仁志はまた乳首から筆をはずして、口で吸いついた。
「んうっ！　んんうううッ！」
ブラジャーの穴から盛り上がっている乳肉全体を口内に入れて、舌で懸命に舐めまわし、ピチャピチャと音を鳴らしてしゃぶりつくす。
「ああッッひいいいいいいいいいい！」
花蓮先生の喉から長々と悲鳴が噴き上がり、またアームチェアのきしみがギシギシキリキリと鳴り響く。
「イクうッ！　仁志君にイカされるの！　仁志君にイカせてもらうのッ！　うれしくて乳首がイッちゃううう――――ぅぅぅッッ!!」
仁志が乳房を吐き出してからしばらくして、アームチェアのきしみが消えた。花蓮先生は背もたれと座面に体重をすべてあずけて、艶めかしい笑みを浮かべている。意識して笑っているのではなく、自然と笑顔になっているようだ。
「はあああ……ンフフフふう……フフ……」
「花蓮先生、ショーツに穴を開けますよ」
笑いながら家庭教師はうなずく。
「お願い」

「今度もじっとしてください」
仁志はひざまずき、花蓮先生の大開脚で固定された股間に顔を近づけた。白い布に透明な液体の染みが広がり、天井のＬＥＤの光を反射して煌めいている。女性器独特の香りもふわっと立ち昇って、仁志の鼻腔を悩ましくくすぐった。
「ああ、もうショーツがぐっしょり濡れてる」
仁志に指摘されて、股間が蠢き、クロッチ部分に新たな皺がよった。折りたたまれた布地からジュワッと愛液がにじみ出て、いっそう芳醇な性の香りを渦巻かせる。
「じっとしてってば」
「ごめんなさい。どうしてもワクワクしちゃって」
裁ち鋏の刃がショーツに入る。濡れてはいるが、ブラジャーのカップよりは切りやすかった。ショーツのクロッチ部分を切断して、恥丘と肛門を外気に触れさせる。
「さあ、花蓮先生も自分の艶姿（あですがた）をご覧ください」
仁志が離れると、姿見の鏡に花蓮先生の全身が映し出される。ショーツの前面に開けられた縦長の穴から飛び出る恥丘の中心は、異常なシチュエーションでの二連続乳首絶頂と共鳴して、ひとりでに大きく開花していた。肉唇が縦に割れて、内側の肉の花びらが咲き誇っている。上部のクリトリスはぷっくりと膨張して、ヒクヒクとひく

つきをくりかえした。
女の花の真ん中では、膣口が開いてはとぷとぷと愛液を吐き出して、肛門を濡らし、椅子の黒い座面を輝かせる。
「あううん、これが、わたし……なんて、すごい……」
ブラジャーの二つの穴から高々と突き出る勃起乳首が、唾液にまみれてヌメヌメと光るのもあいまって、自分自身のエロい姿態にクラクラする。我慢できなくなって、淫らな願いを口に出した。
「これから、筆でわたしの一番いやらしく感じるところを責められるのね」
「はい。責めます！」
股間に迫ってくる二本の筆を、潤みきった瞳で注視する。
「あああああ、来ちゃう！」
陰核を筆で嬲られる衝撃を想像して、背筋をふるっと震わせ、膣の肉壁を蠕動させた。新たな女蜜がとぷとぷと搾り出されて、座面の水たまりの面積を拡大する。
だが筆先は左右に分かれて、開ききった両脚の内腿の上を走った。ショーツの内側の穴どころか、レッグホールの外側をうろうろと迷走する。
「なっ、どうしてっ⁉　やああ、くすぐったい！」

ガムテープで固定された両脚が暴れだし、肘掛けをきしませる。身体全体が敏感になっているが、太腿は快感よりもくすぐったいと感じてしまう。花蓮先生の困惑の顔に焦燥の色が浮き上がった。
「そこじゃないわ！　仁志君、早くして！」
「一度クールダウンしたほうが、いいと思って」
仁志はわざと真面目な顔をしてみせた。
「これは焦らしプレイなの⁉」
「じつはそうなんです」
自分の太腿全体を右に左に移動する二本の筆を見つめて、花蓮先生はうなずいた。
「いいわ。プレイなのね」
しかし頭では納得しても、肉体は納得していない。股間で開いた肉花の中で花弁がザワザワと騒ぎ、クリトリスがズキズキと苛烈に疼く。膣の奥が飢えた獣のごとく、刺激を欲する咆哮をあげて、花蓮先生自身を責めたてた。
（ああはあ、わたしの中に別の野獣がいるみたい……）
女性器ばかりか、すでに一度絶頂を迎えたばかりの二つの乳首までが、より勃起をきつくして、ビリビリと怒りの電光を放っているようだ。

逆に筆の刺激を与えられている両脚はくすぐったさに笑い、ほどよくついた筋肉のあちこちをビクビクと痙攣させる反応をつづけている。

肉体の相反する状態に困惑して、花蓮先生はマラソンをゴールした後のランナーのように荒い息を連続させ、腹全体を大きく波打たせた。

「はっ、はっ、はふ、はっふ、ふううう！」

いつの間にか左右の目から涙がこぼれて、頬を濡らしていると気づいて、花蓮先生は叫んでいた。

「仁志君、だめだわ！　わたしにはこういう焦らしプレイは無理みたい。ちっとも楽しくないの。お願い。早くとどめを刺して！」

「わかりました」

仁志は右手の筆先を、今にも破裂しそうなピンクの肉真珠に押し当てた。左手の筆は、ぷりぷりと充血した肉襞をこする。

その瞬間、待ちに待った快楽が猛烈にあふれかえり、衝撃とともにクリトリスが爆発した、と花蓮先生は信じてしまう。

「ひっいいいいいいいいッッ!!」

吹きすさぶ快感の疾風に飛ばされて、たちまち絶頂に達した。しかし仁志が操る筆

の動きは止まらない。今まで待たせたお詫びというように、女芯と粘膜を毛の束で嬲りつづける。女の最も敏感な部分が大量の毛先につつかれ、なでられ、掻きまわされるたびに、花蓮先生の官能は上へ上へと昇っていく。絶頂にエクスタシーが重なり、視界が白い閃光に何回も焼かれた。

もう、イクッ、という言葉すら紡げない。ただ言葉にならない叫びがあふれるばかりになる。

「きゃふ！　くふう！　あおおおう！　あひ、あおおおおうううっひひひいいいいいいいッッ!!」

絶叫する意識の底で、体内の別の感触を知った。

（ああ、出ちゃう。いっぱい出る）

そう感じた瞬間、女性器から筆が離れて、どろどろに濡れそぼった女肉の奥に仁志が口をつけた。タイミングを合わせたように、大量の愛液が噴出して、仁志の口の中に注ぎこまれていく。

「あっ、あああああ出てるう！　仁志君の口に出してるうう！」

花蓮先生の悲鳴を心地よい音楽として聴きながら、仁志は一滴も逃すまいと懸命に花蓮先生が排出する体液を飲みこみ、喉を鳴らして胃へ送った。

花蓮先生の噴水が収まると、仁志は舌で口の周囲の滴を舐め取り、股間から花蓮先生の顔を見上げた。花蓮先生も茫洋(ぼうよう)とした瞳で、仁志の濡れた顔を見下ろす。
「わたしのを、飲んでくれたのね」
「花蓮先生もぼくの精液を飲んでくれたから、ぼくも花蓮先生のを飲みたかったんです。さっそく夢がかなった。それで、そろそろぼくも出したいです。花蓮先生の中に」
「わたしも中に出してほしい。おちんちんが欲しいわ」
「はいっ！」
仁志はすっくと立ち上がり、花蓮先生に見られながらTシャツと短パンとトランクスを脱ぎ捨てた。
そして気づいた。花蓮先生をアームチェアに縛りつけたままでは、挿入がかなり難しいことを。
「ガムテを剥がします」
左右の脚に巻いたガムテープの先端をつかみ、一気にほどいた。粘着が離れる音がバリバリと高らかに鳴り渡り、花蓮先生の鋭い声が飛ぶ。
「痛っ！」
肘掛けに乗った脚の皮膚には、赤い帯状の痕跡がくっきりと残された。

「大丈夫ですか？」
「平気。体験して分かったけど、この痛み、ちょっと好きかも。手もほどいて」
仁志は背もたれの後ろにまわって、両手を縛るガムテープを剥がした。予想していた通りに、巻きこんでいた髪の毛が何本も抜けてしまう。
「痛いっ！　でも好き！」
花蓮先生は椅子から立ち上がると、ブラウスとスカートを脱いで、きれいにたたんで座面に置いた。
「せっかくだから下着はこのままね」
「ぜひ、そのままでお願いします。それから今日は騎乗位に挑戦したいです」
「いいわ」
仁志はアームチェアの横に仰向けに寝そべった。
花蓮先生は仁志の腰を跨ぎ、そろそろと膝を曲げ、股間を下ろしていく。仁志が首をもたげてじっと凝視する前で、花蓮先生の右手が伸びて、ガチガチに硬直したペニスを捕まえた。
花蓮先生が視線を横に走らせると、居間に置いたままの姿見に、今まさに勃起男根を下の口で咥えようとする自分が映っている。実際には仁志の身体のほうが大きいの

だが、相手が年下だけに、自分が獲物の小動物を貪る肉食獣に見えてしまう。
（あああ、やっぱりわたしの中には獣が棲んでいるのかもしれない）
右手で亀頭の位置を調節して、ショーツの穴から咲き乱れる濡花園に触れさせる。
「あんっ！　おちんちん来たわ！」
ジュプッ！　ズプズプニュチッ！
粘つく摩擦音を鳴らして、膣孔が仁志のシンボルを呑みこんでいく。花蓮先生の中に亀頭まで入ったところで、仁志は我慢できずに腰を突き上げた。一気に肉棒の付け根まで挿入して、残った勢いで家庭教師の股間を押し上げる。
「あふあああっ！　仁志君が入ったわ！　いいっ！　わたしの中がいっぱいなのっ！」
「今日も花蓮先生の中は最高です！　おおおううっ!!」
花蓮先生を椅子に縛ってからのすべてが、仁志にとっても前戯になっていた。すでに精巣は決壊寸前だった。今回もまた膣に突入しただけで射精がはじまってしまう。
「早くてごめん！　花蓮先生に出るうっ!!」
「はひいっ！　わたしも仁志君に射精されたら、すぐにイッちゃう！　イックうッ!!」

花蓮先生は両手で仁志の脇腹をつかんで、長い黒髪を振り乱した。ブラジャーから乳首を飛び出させた巨乳が華麗に踊りまわる。鏡に映る自分のエクスタシーの舞踊が、槍のように心臓を貫き、鮮血をえぐり出す。

（ああ、わたしは獣だわ。快楽を貪る欲望の獣よ！）

仁志も自分の身体の上で躍動する女体のダンスに見惚れた。妖しく舞う身体を自分のものにしたくて、反射的に花蓮先生のウエストを両手で握る。

互いの腰を支えにして、家庭教師は腰をくねらせ、若い生徒は腰を突き上げ、二度目の絶頂と射精を目指して激しいセックスダンスをくりひろげる。

「あおおおう、仁志君、もっと突いて！　わたしを空の上まで突き上げてっ！」

「花蓮先生！　いっしょに空まで飛ぼう！　うおおおうっ！」

※

その店は、仁志が住む町とは別の市にあった。

別の市で最も大きい商店街から離れた道路沿いにポツンと建っている。屋根も壁も黒々と塗られた外観からでは、なんの店なのか判然としない。入口のドアの横に『ヴ

ンダーカンマー』という店名のスタンド看板が置いてあるだけだ。店名はドイツ語で『驚異の部屋』という意味で、ヨーロッパの文化史で重要な言葉、と花蓮先生が言っていた。

正体不明の店内に一歩足を踏み入れれば、一目瞭然でアダルトグッズショップだとわかった。

けばけばしいポップやエッチな使用例の写真に彩られた棚の間を、仁志と花蓮先生はゆっくりと歩いた。仁志はこの手の店に入るのははじめてだ。未成年だとばれて問題になるかと思ったが、店員も他の客も、仁志になんの関心も払わない。こういう店は、客に愛想よくしないことがサービスらしい。

二人がこの店を選んだのは、知り合いに出くわさない離れた土地にあって、ネットで評判のいい店を検索した結果。二人はより充実したプレイを楽しむために、専門グッズを入手しにきたのだ。

店内を何度もめぐって、人類の性生活に関する探究心と技術の向上にいたく感心させられた。そして良さそうな商品をいくつか買うと、すぐに店を出て、品質を確かめるためにここに来るまでの道路で見つけたラブホテルへと向かった。

自分たちの楽しみのことで頭がいっぱいだった仁志と花蓮先生は、まったく気づか

なかった。自分たちが店を出た後に、棚の陰にいた男女が交わした言葉には。
「仁志のやつ、あんな巨乳美人とこの店に来るなんて、どういうことだ」
「ねえ。知っている人が来るなら、ここはもうやめましょう」
女の言葉にこもる不安の音色には、男は注意を払わなかった。
「話をつけなくちゃならないな」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索